

かみす

2026年

8

No. 460

Kamisu Discovery vol.38

神栖ディスカバリー 38

特集

波の先にあるもの

サーフボードづくりから見える神栖の海



波崎で長年サーフボードをつくり続ける高梨さんの工房へ。サーフボードづくりの工程を追いながら、神栖の海とともに育まれてきたサーフィン文化の魅力に迫ります。

今月のおしらせ

市職員採用試験…………… P6
ペットボトルキャップの回収開始…………… P7
夏の出会い！縁結びサマーパーティー …… P9

広報かみすが動き出す

アプリをダウンロードし表紙にスマホをかざしてください。詳しくは12ページ

アプリ
[COCOAR]



特集

波の先にあるもの

サーフボードづくりから見える神栖の海

サーフスポットとして知られる神栖の海。波崎地域には、約50年前にサーフィンを始め、約40年にわたりサーフボードをつくり続けてきたレジェンドがいます。今回はサーフボードづくりを通して、神栖の海とサーフィンの奥深い世界に迫ります。





工房でサーフボードをつくる高梨さん



①波崎海岸 ②サーフショップ ③サーフボードで波に乗る高梨さん ④サーフィン体験のイベント ⑤工房に並ぶ道具

③

サーフィンが根付いたまち

神栖市の夏といえば、白い砂浜と青い海。夏の海水浴シーズンが過ぎても、まだまだ楽しめるマリンスポーツがサーフィンです。サーフスポットとして人気の波崎海岸や日川浜海岸は、遠浅で水がきれいなため、これからサーフィンにチャレンジしようとする人にもおすすめです。地元の皆さんにとっては、波乗りに熱中するサーファーや、サーフボードを積んで行き交う車なども、見慣れた風景となっているのではないでしょうか。

ところで、サーフィンが根付いているこのまちで、サーフボードがつくられていることをご存じですか？今回は、約40年前に波崎地域で唯一のサーフショップ『LAP BEAT』を開業し、サーフボードをつくり続けてきた高梨一夫さんを訪ねました。波崎地域とサーフィンの関わりや、サーフボードづくりの話聞くうちに、興味がどんどんふくらんでいきました。

サーフスポットへの歩み

高梨さんがサーフィンと出会ったのは今から約50年前、19歳の時です。「友人がサーフィンをしているのを見て、サーフボードを借りて遊びで乗ってみたのが始まりです。最初か

ら面白くて、明日も来よう、また明日もと、3日連続で海に通いました。当時はまだ、波崎海岸でサーフィンをしている人は少なかったですね。その後、昭和60年に新しい波崎漁港ができると、サーフポイントは少し北寄りに移りました。しばらくして『波崎南風サーフィンクラブ』ができて、大会が開催されるようになり、サーファーの数が増えていきました」

2000年のアマチュア選手が集まり、サーフスポットとしての知名度が高まりました。高梨さんも友人に誘われて大会に出場し始めます。やがて全日本選手権にも出場するようになり、優勝の常連として活躍。年齢を重ねてからも実力を発揮し、レジェンドと呼ばれるほどの名を広く知られる存在となっていました。



茨城波崎SURFING GAMES



①サーフボードの素材に輪郭線を書く



②電動カンナでだまかな形に削る



③手作業で削りながら、カーブの形状を確認

自分に合うサーフボードを ほぼ独学で試行錯誤

サーフボードについては、最初は既製品を購入し、やがて自分に合ったものをオーダーメイドするのが一般的だと思います。高梨さんは、何がきっかけで自らサーフボードをつくるようになったのでしょうか？

「オーダーしても思い通りのものができないので、自分でつくってみようと思ったんです。最初は知り合いにつくり方を教わりましたが、ほとんど独学です。つくっては海で乗ってみて、ちょっと薄かったから次は厚くしよう、幅が広かったからもう少し細くしようと、毎週でも新しい1枚をつくりたくなってしまつて。しつくりくるサーフボードができたで一瞬喜んでも、次の日になるとやっぱり違うのかなとか、いつまでたっても満足のいくものはつくれない。何年やっても、とても難しいというのが実感です。サーフボードによって波に乗った感触はまるで違います。ただし、どんなに良いもののできてもサーフィンがうまくならないとは限りません。筆が良くてもうまい字を書けないのと一緒ですね」

最初は

自分のためだけに

つくっていましたが、友人

から頼まれたものを手掛けるようになり、やがて仕事として注文を受けるようになったそうです。

削る・固める・磨く 正解はない奥深い世界

サーフボードは一体どのようにしてつくられるのか、高梨さんの工房で製作工程を見せてもらいました。主に、削る・固める・磨くという3つの工程があるそうです。

①削る

まず、発泡スチロールに似た素材に、自作したオリジナルの型を当ててペンで輪郭線を書きます。その線に沿って切り出したら、プレーナー(電動カンナ)でだまかな形状を整えます。

そこから先は繊細な手作業です。「寸法を測ったりカーブの流れを

目で確認したりしながら、微妙な調整を加えていきます。これぞ理想的な形」という正解はありません。この削る工程がサーフボードづくりの肝となります」と話す高梨さん。次の工程へ進んだら、もう形を修正することはできません。

【写真①②③】

②固める

形が決まったら布を巻き、その上から樹脂を塗ります。すると布に樹脂が染み込んで固まります。サーフボードに色をつける場合は、樹脂に塗料を混ぜて塗ります。「1時間後には固まり始め、1日でほぼ固まりますが、硬化剤の量や気温によってだいぶ違います。暑すぎると早く固まるし、寒すぎるとなかなか固まりません。そのため、年間を通して工房の室





⑤ サンドペーパーをかけて磨く



④ 樹脂を塗りサーフボードを固める



昨年開催された「夏休みサーフィン体験イベント」。楽しそうに体験する子どもたち

温は15度から25度の間に保っています」【写真④】

③磨く 完全に固まったら、サンドペーパーをかけて表面を滑らかに磨き上げます。この作業を丁寧におこなうことで、美しいサーフボードに仕上がります。【写真⑤】

1枚を仕上げるのに10日から15日かかりますが、これまでにつくった総数はなんと1000枚を超えます。高梨さんは69歳の今も、台風や荒天でどうしてもできない日を除いて年間300日はサーフィンをしており、自分用のサーフボードを、季節ごとに年間4枚はつくっているとのこと。これだけ熟練の技術をもって心血を注いでも、いまだに成功と失敗は半々くらいなのだとか。その言葉から、サーフボードづくりの難しさや

奥深さが伝わってきました。

サーフィンを楽しみ、海を守る

神栖市はサーフィンを気軽に体験できる環境にあります。今年7月に実施された、小学生から大学生までを対象にした「夏休みサーフィン体験イベント」主催・日本サーフィン連盟茨城波崎支部 波崎南風サーフィンクラブ、後援・神栖市、市観光協会)では、未経験者でも気軽に参加できるよう、体験用のサーフボードが用意されていました。また、『LAP BEAT』ではサーフィンスクールを実施しており、最近では40代、50代の受講者も増えているそうです。

神栖市では、美しい海を守るための活動も熱心におこなわれています。毎年海水浴シーズンの前に市民の皆

さんと協力して大規模な海岸清掃を実施しています。さらに、日本サーフィン連盟茨城波崎支部のメンバーも長年にわたり、4月から10月まで毎月海岸清掃を続けています。

サーフィンは楽しむだけでなく、神栖の海の魅力を体感し、きれいな海を守る心を育むことにつながるようです。太平洋から昇る朝日の美しさ、海岸沿いに風車が一直線に並ぶ姿など、神栖の海の雄大な風景が今日もサーファーたちを魅了してやみません。

一枚のサーフボードから見えてきたのは、神栖の海の魅力と、それを愛する人たちが育んできたサーフィン文化でした。その思いは、世代という波を越え、これからも受け継がれていきます。

神栖ディスカバリーを

カミスマカでも楽しめる



「神栖ディスカバリー」を、神栖市魅力情報発信ポータルサイト「カミスマカ」でもご覧いただけます。紙面で紹介しきれなかった情報やコラムなど、オリジナルコンテンツも掲載しています。ぜひご覧ください。

